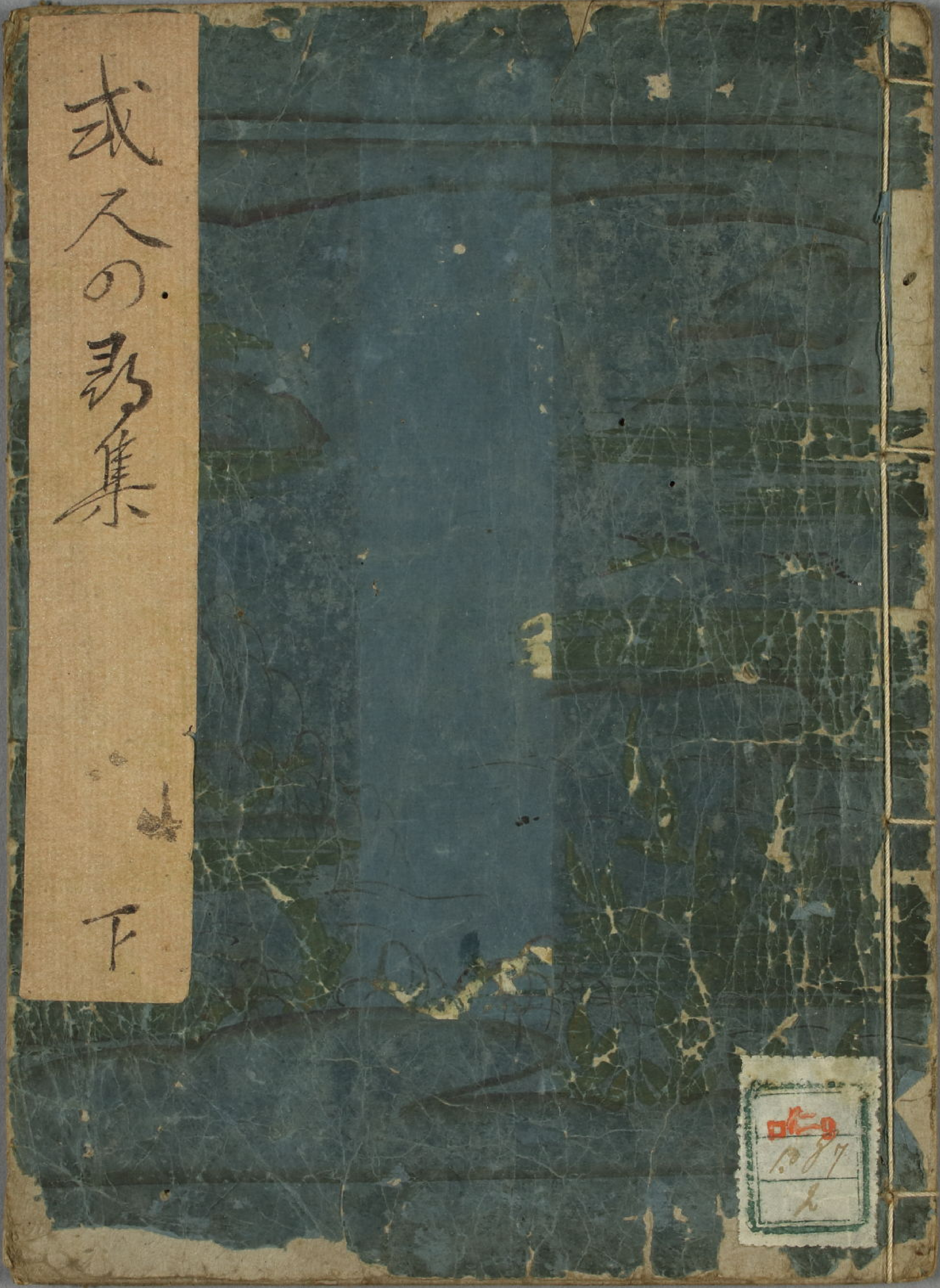


武人の歌集

山

下

ロ仁-9
1.87
2

或人の鏡 下 目録

一 女他行雑談しの事 付り 上臈衣裳の事
一 碁将棊双六貝合并貝批判の事
一 薫香を焼ハ遊戯にあらざる事
一 婦人の書見好なる事
一 婦人講義をせざる事 付り 古風上臈衣裳の事
一 香又書味善悪しらずめる事
一 気性のよにつけて婦人家云ふの事
一 或問忌理合紀を難ずる事
一 此書発起の女子へ愛文撰の事

あら人のをしへ　下

婦人（ふじん）同志夫婦（どうしふうふ）の勝手（かつて）によろしくゆかしくも上座下座（じやうざしもざ）を

のかまひなくと給ふハこゝろへぬわざにてんでり女とても

も相応作法（さうおうさほう）の給ふんよ人にもゆづるぞしとやかに上

座より給ふ人ハ無礼（ぶれい）よ給ふらんか　云しといはゞ不届（ふとゞき）

にちんぎり返ことに夫婦の勝手なるまゝとてゆづりあふ事

されバなほあけおけり夫婦乃心をもしりてはにそこよ

はら給ふもぼうずたゞけしきのぬらずれのかや

給ふもかるとなくさんでり女ハ客まで恥（はぢ）しくもんぱ

たくつる良（らう）くしくいやしうりぬとぞ言（げん）ぬさとしさ

をすに給ひばこそまてもくろしぢよらぬハいま

ど乃女房（にようぼう）ハうかんすへハかんじらいさはかなる

ことくおりましてゆづりを給でこれハならしずる
に侍きバれ給ことへよし世給へと是非(ぜひ)なくとゆづり
給ひくまゝ人ハよそにおもむく親指給ひんとき
給をもちしだいらじこちの座(ざ)敷(しき)を見めぐらせばいう
かゝり端(たん)をかゝる家(か)居(い)にても四方のことよ絵(ゑ)く
二さこし給ハりハ奥(おく)深(ふか)さかへこたなぶすハ侍しど
たゝ紙おもてかちしだく侍り今をそこしそうきへ
よしせ給へるどけるころあるバゐとひあるしハ
女房心すくまもそとにおねく二つげりハ侍らじどう
バ像(ざう)みとさくきこ八其(その)隅(すみ)ぢう紀がハ屏(びやう)風(ぶ)そて也
でとのづらおくかりつるべし　同国よしにおけを
のおとくなつるハおまやかなるにうる給のつきやしにくし

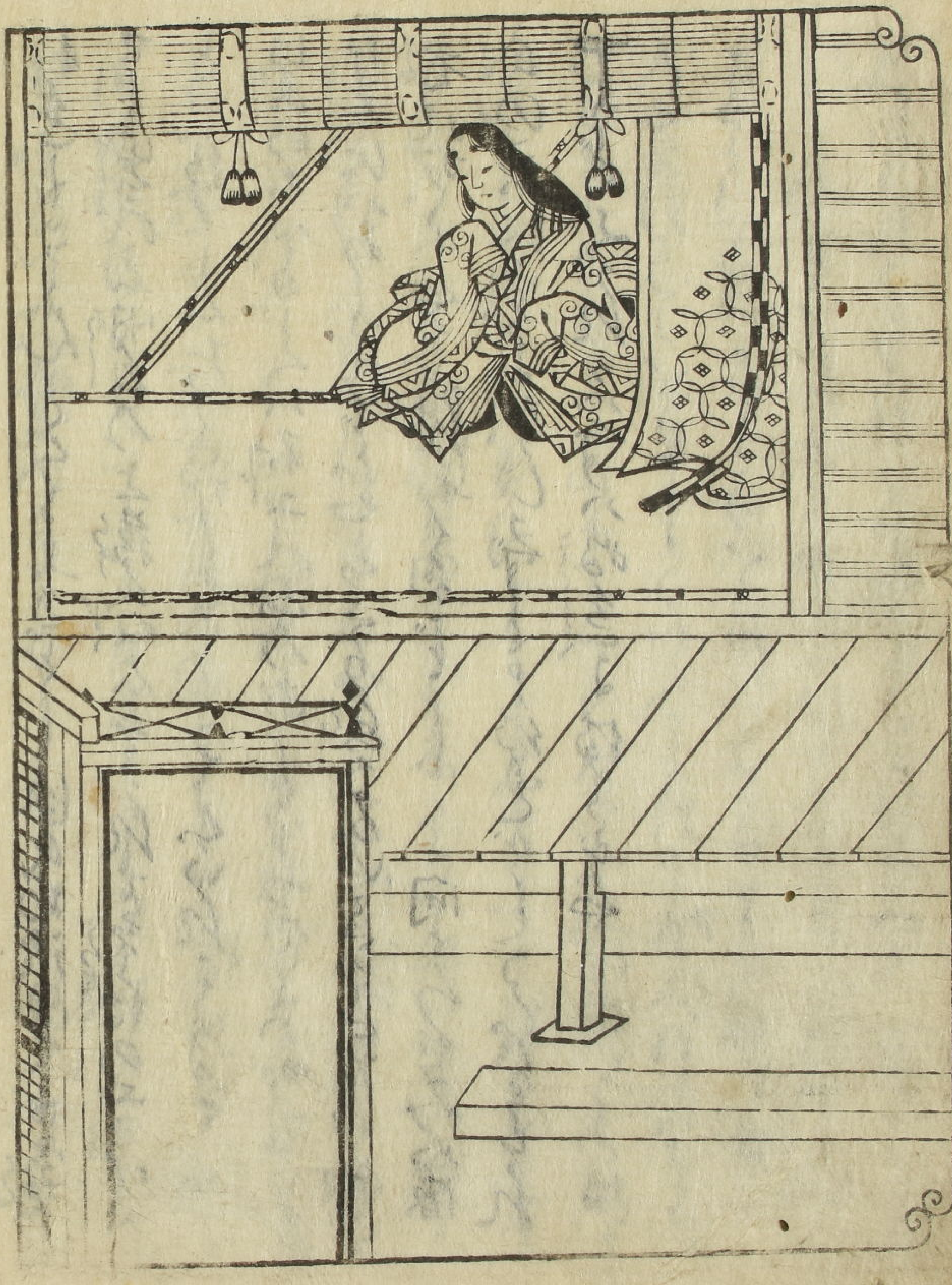
むつりとらしのとろかなるをけくこえハすくこころく
もんべりけるどこう給とたくつるちんだうバそ
きまれくわたつれ女ハ高(かう)慢(まん)自(じ)慢(まん)とくうしそやし
侍らん　云ひまゝもわたらびそれ自(じ)慢(まん)とし侍
らべこそこう給をとるうくつすといふハ幽(ゆう)源(げん)とけるかに
うすゝ玄(げん)妙(めう)とおぐらくんのどくそこもまちゝにほど
ぬうく源(げん)底(てい)とみえりとをるでゝござれどもおりてるろ
おハうつりてこうらくてもげさらりハゆうつりてる
れすにちんべりつ源氏わづらるもしほらんじいく
りんそうみくバむとりほ合(がつ)点(てん)まいりすにちんだう
今ほどもほ自(じ)得(とく)なきされはやうりはゆがうてろん
づけりまふぐらわ給といふしらんまうされまく

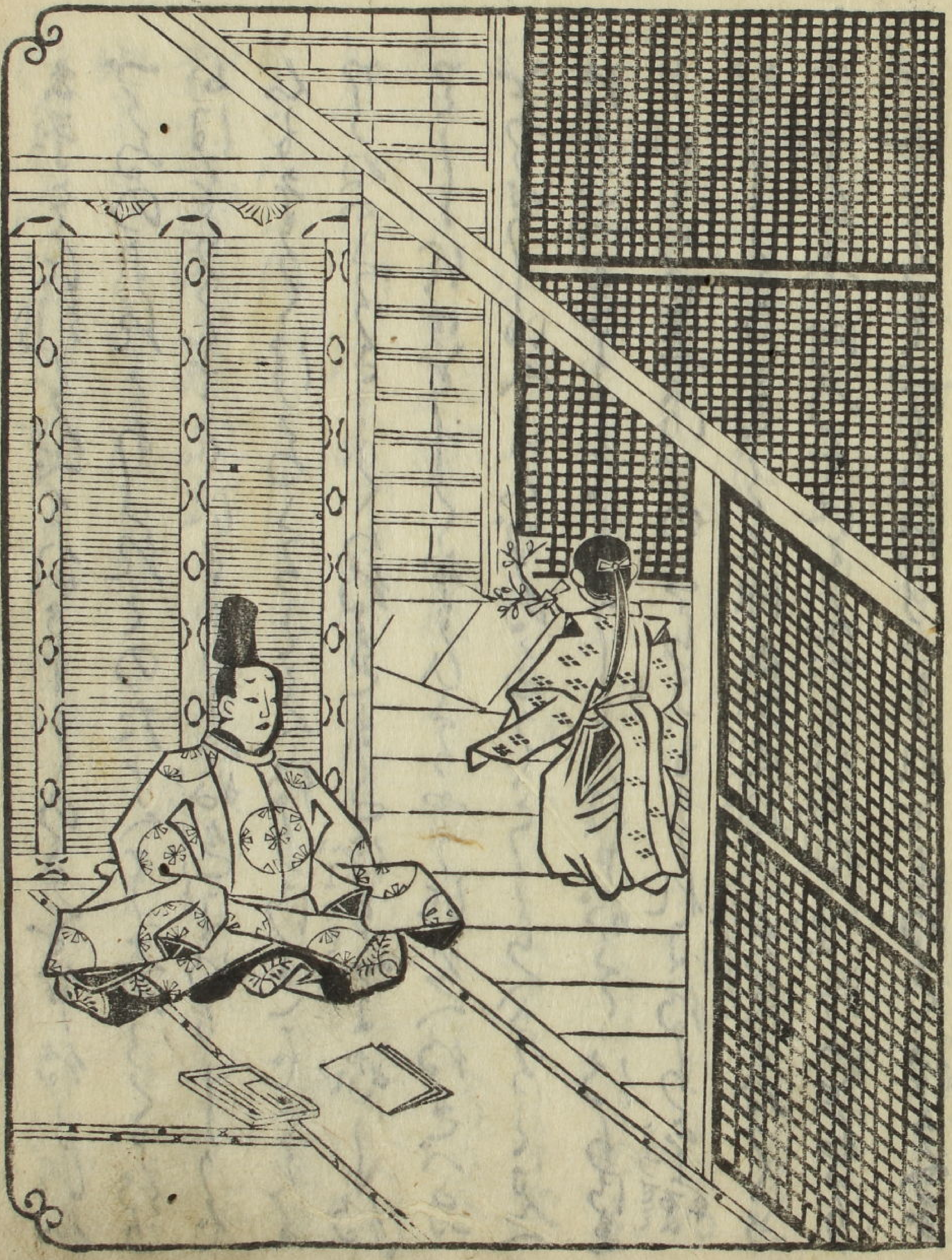
こゝろたゞしくおはしますかたのことをしるしつくせ給へく
我ゆかりのむすめひとり侍りおさなければかんの
郎ゝ子女よくかりていとよしおりひねづり侍べり
かうらおずいとうつくしうくよ殿がんりそ付上
らうしくりくなせバ良くじうあひざやこぞ
御ゆづりに侍りとゝりおごやかにちんべきハ人ゝ
人のことにわくろうだゝしれとゝのまさとえさ
へびおもゐまうてづりに侍りそれよ母いとあれ
人まくらくとよじそて分婦によくわまうとを
るはれが侍りくらくとしくちんだれべ百人にも
をぐ事もちんづりにしかしぬんのたうさしそ侍事と
どもみなゝぬたる宰家もちんづはまたとれゆかり

の中にむすめ侍りこ事ハ母わしはまよ女子は人を
うとくえいうたしゝめなくなるしひされバ悩をよくし
ことハなきこくの人は同しもおわせり侍りしが彼人
きくれ女子なりしむすめ女子乃ことをまことくす
けうすれ侍りしがけむすめ座に侍くしわ其ば
足袖入れかりしてする男ときうまひめうらいひてあれ
よ侍ひめうらくふまぐくもさうくりしふなき事もなく
めにもおどろく事もちんづりしやうん常ハたゝみ
ざいりわるく鬘とりんぞれ衣装とゝぞし粧ひわ
さくはしむかさと彼むすめにもちらひく座
にまじりけれどハ私事も俗まよそらしくまびかなる
事に侍りしとかやかゝむすめかつてあてまくは

くれなゐをそ染そてかゝしつてにくらべ文ん字かれと
まことひもありべきものゝさハなくてうぐひすの声にじん
じやうにあけつゝたくゐやとれじく思ひろ小袖も名ある
乃ぶにめでをるしくいふてはもかゝ人のいひたゞる
とうじをくみりのまつぐくをたぐふぬ物のごくれず
ハいつもしるれすにしとうしゆうしとなりそくも
とんのうゑの月優が開しくあうりはなりつハ今う
にほしう人あらんやうらふまんや言優うろとくさ
りさとはくうにちぐるはつうすとおぼゆとん申わ哉
とうてハゆとくバ富士の山のごとしちこうれ半天と
けんげけどもいづりさとりうみてくをとうんなくうろてし
言優といふハ鴬の香るよろとみて鶯といふ鳥の

わきしもうしんとくうてふかござし源氏物語にしても逸
せまた紫式部明石の上藤発んそうれと空蝉の心さ
とをわしんたくさなきしどもこきんいわれそうろなり
紫明石ハゆとくバ和二の山乃おしくうつせみハかうしゆん
なりたハあし○じとも書くうり恐ありいききくこひり筆
都れかぐしやうびれあうがごし　同うかたハ源
氏の右に宮よなしひかずとや何ともとうばるれ
やうぐ文うれゝ名すハぬ色よ侍とじや





玄宗ことに引(ひき)そんべうハかうしよくのきみとハや侍しじゆん
づるのよれとあしれとのたとへすしげらくや侍り
おほきらうしずくにまことしハぬ色(うつしよく)よ侍りしうぐ
んもそうくはかるゝるとゝく侍りけれましてごとぞよ
かゝぬやうらさまゝくハ侍まきまこ伊予介(いよのすけ)か嫁(か)し侍
まし依口とうしくおりひうろやうに見え侍きべ身
とうせしゆくよんづるゝぬくらしらくゝろと見え
侍りいづまうしてもうしとはやがて侍り隆
どもうつせみほどのよそうもまれよ侍らず空蝉(うつせみ)
かうしうるまきども源氏のたね(ずいしやう)れぬ美色(びしよく)よぬるくや
でながら今時乃女にそんべうハたね(ずいしやう)う引(ひき)給へとおそり
にはところそおりひ侍りせそれとあるく伊予か守

妻(め)とうちらく不義(ふぎ)ハあさましき事と流石(さすが)にたしなみそ
たりハ猥褻(わいせう)なるこゝろも侍りやうにたゞハせしまハかの
時代(じだい)は実(じつ)すぐにうけきべこれぐらうれずハくらし
かゝぬうすとそまきもくちて孫へうらく情(じやう)と見え侍
るたとる家のなてしも此作口かよ守すしものふ
義(ぎ)にとはどゆきすみハこゝろうしげらとしまでハ
今の世ハごとく文盲(ぶんめい)なうしねバ志つげうと見え侍り今
ともいやしきりの作田舎(ゐなか)うんどれあとも志つねハせ
守ぐひおほしとなりけれまてべこちらじ愛著(あいぢやく)恋
書窓(しよさう)通(つう)の丈婦夫(をつと)死して煩悩(ぼんのう)れ多うにむせんで
他(た)よんなくいうひハ死しては尼(あま)よなるあまべき志つ
げうりのハ皆気(き)女とやけりばまどひむうしも今も

かうりおりしまさずうつせミ人女にわかれたむなしき
に蟬とよくみづから源氏よめで凡女めうすしさへミ
さやうちがひてやもされども其るぬ敵のこゝち
しくうきてけそするにハむりきこゝろと見えて
ゆりけまでよう源氏も後一部のうちしまくハあいそ
はちかれぬ文ともやゆるべくされうつ所ミ太ねよめぐ
すゞら着後まりわくなびひず侍らぬ死して継
の紀伊守るどうし申しく所縁にまづひおもけで
うつせみるもしくおりひくかずて尼ようりくまた死し
てのちも源氏にもるびきざるハしもせうに侍ぐりけまし
だ当世のぬ文よりハ物さかしくよれとこ後お何くね
すけまで源氏物語とよく見るる人ハ恐れりのからも

かなしきくらぞこときハ当世に源氏物語のやうに戯
もちぬ文をうけきたなちがきひとつも聖人の益に
てゆりけまでなかなかうつせミのさびひにんづまてん
よからばゝ好色おもんずるはおもれつてしまぞ久し
て貞女の名ゆ将むりつミ

弐 同碁将棊双六ハ博奕なり貝合并貝におほひすらぬべら
ばけものといふほどの慈母ゆゑよしとは云や
去いしへハ博奕あれども今ハ風俗とうまきり男女ともに
去子の交のミちる人ハ碁将棊にてまおしめず琴書代
たのしミ芸をなすそに日をおくりすか聖人の交り
をするそとしふども男子ハ武芸などおり男子ハまどかう
むゆうとしめてまでべさ字のおそりさゝんとちかにいそ

やさし女子ハ文よりせ御し我ハ琴書にいとまうけまど
も女子にはようなるハまさるれバ琴書もうけかゝる
ましハかどかなぐさみとせんや多くハ双六碁将棋か
まさ中にはきひとりきそれりとせバ誰か交らん
ましつゝ女子なくらんで何とか友とせん翰墨を友と
せんかく人ハ人を友とすむわざうしハもちひずといひて
もちひべきなれども何ほとくハ碁双六のあそびとな
そにさみる目なりうく志げまり居べけれど
ざることきのごくうらん碁双六になどのくおきにの
みうり居かこそわしけき不時の挨拶まそなへんふ
女子におゐてハ何ごとくるしうらん又志ねくかきと
禁ぜし悪事とするしぬるにへりのかほく舅姑とそ
しりいくく実多言まく目代とくらんするとおそろ三の貝
貝合といへども賭よそれど博奕なりごとぐ猶といへ
どもうけりのなく勝負とおそハず唯あいさつ又ハ不
時のすぐれし女まきく人の沈着まかるへんま何の博奕
女とゐすかおらん女ごにおゐて何く科あるし博奕
を悪と為よは勝まるとあきゝ散乱
問老子ハ為しふる体せばそ何ぞ三時の挨拶と云や
云有徳女ハ論ぞぐらず不義とも知るべしなれバ
とも云べし慈母の云や悪女れとしへなるべし
或問慈母薫香掛香のことハいかゞ達れて似より五子
これとどうハ何のぞや、、礼記に総角し髪毛とも
ちる纓紐芳といへり夙に佩図とすしとるか

何のぞくと云事があらん　同次第と云ハ何ぞや
云艶香紙并紙付書とのかりのといへども也なる
ものハ男女ともに衆をむけらるゝぬかりど意趣し
きけられかけ書るなどとへ包がん紙ゆりくさうしとおな
慈母次第といひされと野なるとあるまじきす
りけしもよし

或婦人さうりくはかゝ紙見んとく同云とし無理さけ
婚つまでもまひも隠じけ今すぐの野人もはう
よりハむそうしづもようにするりよ縁らびあんべ
ふなりところかなすかうらも書紙見んる人ハ百が中に一
もともられまつるす侍までもも世の中すハまさぬ
やくとやらむとれさゝ見んとするハをれらく人のよ
むづにいやがらくひおはくおりしましくべさやうの
人ハれとし車にはむでらるもおつしましても
ぜんまれすにおつきましはせかく草げうしに
てもみんなりていましくれ義理にゝんじちんべき
だとれちかくて大和乃ことをもみんなるぬすも侍つ
べくれどもうれぐにむつしがるやくひおはつまし
きむふかげうしきすに侍り　云ぬまくにいとぬ
るれ農工商の妻娘なるどらそハ書見もなりがたさ
く侍りや武士邪といいかでられかおんまくく人もそく
るにいとまなしといへども琴書ぬるのしこは
なすかうれひまハんまでにうけちんべうべいとやそ
きるにはれぞ人とうまきうる幸にハそろし

のうかぶきよくもふんむれんなるハ婦人としては
ありがたれすにもんべりちろうにりんなぶさるに
むつましがるそすぐひハ徹ぞうにそふうげうすにあり
おきハ乎婦人乃よがづつかにハちんべつばや家に居るくハ
父母の胎なり父母正しくていきけるれちやくとし
へなしバ人の性ハこゝろ善なるもへなどの善にうつりばらん
又人にゆきてハ夫の継なりまた志ありて亭に琴書を
去乃かじぬ人もとのはらかず素志ハきるぶやしてあり婦
人の行跡野なるのこゝろまゝず父母夫の名をまくさ
引出すにありとべきこうしんなる婦人ハ三史五
経まなびとそわきまへてよくしくありしめ四書小学を
べんずることあるしめありべん文人がるはしれ乃ことに

もちひず天然美質にうまれてもきりやうなく才
なけれバこのが質をまけもだ行跡にあるのきはしき
ふるまひしくみそしる人もなけれバおのづから
まんしくがくりんせバまどもぐまなりとおりへバ
をのづからおこなひもしまく一生又前ぞおも
しはまるよいをもちるぐるしあり女のこゝろにハ
男にもけしかぐひおほくありけれバ少月明たるの
ハ貌の美なるよりこゝろも少し変ずることのありまきと
のもかぐ変人よわるけれバ口をとしれとけいらく
きてがくりん又にをりてづつるにあらるぶきずんきき
らふぬくひハ聖人といへどもまぬがれかたし
かぐられあくひハおばばしのたぐひありても

いつはりかざる飾(ざり)にもうんせいのむくいおほくおはしまし
さかゆる者(もの)は通(つう)ぜけれどもならはぬ人の家(いへ)もさかへん
としてはかりすぐさやうのさいはいでくるものなりとて
むべなり　同じ人の家とうんよそは善人のすまゐ
すいぶんすゑゆくまゝくなるや　不積悪(しやくあく)の家はさぞ
に亡(ほろ)びんときこゆれども其積悪(しやくあく)の報(しよく)は勢(いき)ほひまさればお
とらふるのきまへたゆるをもなしずまこと積悪
うしなへども代々に続(ぞく)する親族(しんぞく)知音(ちあく)諸氏(しよじ)人の手をかり
善(ぜん)の家のみ世に富貴(ふうき)をとくさきを割(わり)くとして
せ世(せい)なるのみといへるさくひは天のひくむとよゆ
かまたば一度(ひとたび)はとくらめる変(へん)すりもれども天
の賞罰(しやうばつ)は人の賞罰のごとくけやけからずおもや

けふなれば次第(しだい)におとろへゆく終(つひ)に亡(ほろ)びんとす
まゝ又善(ぜん)人いくさうく家はひれとなりてそのまゝて
なりけれどもこゝ善人気(き)質の稟(うけ)にしたがひて衰微(とんぶう)
所(ところ)あましば再家(さいか)を引(ひき)とこするをけがらくなりはじゆへに
元子(ゑんし)ハ数(つゐん)で夭逝(えうせい)にも富貴(ふうき)にもおごりすなほ天命(てんめい)
安楽(あんらく)のさ己(すで)に絶(たえ)るとおこすにとよんではほどちかく
やまざるゆくさ孝子の家に生(むま)れば含笑(かいあくさ)にありて又孫(まご)
悪事極(しごく)よいふればん天命(てんめい)といへども新(あら)たむべれ知る事
を終(つゐ)は亡(ほろ)びなりてにとぬく婦人(ふじん)のなすること
始(はじめ)よは終(をはり)ねども男子(なんし)は形(かた)ちつよくいと強(つよ)からは
仕(つか)ふたいかば内(うら)くよはくするに依(よつ)りましば婦人(ふじん)
いづもつくさん心(こゝろ)なくてはかるはゞかるまに依(よつ)て又は女(をんな)を

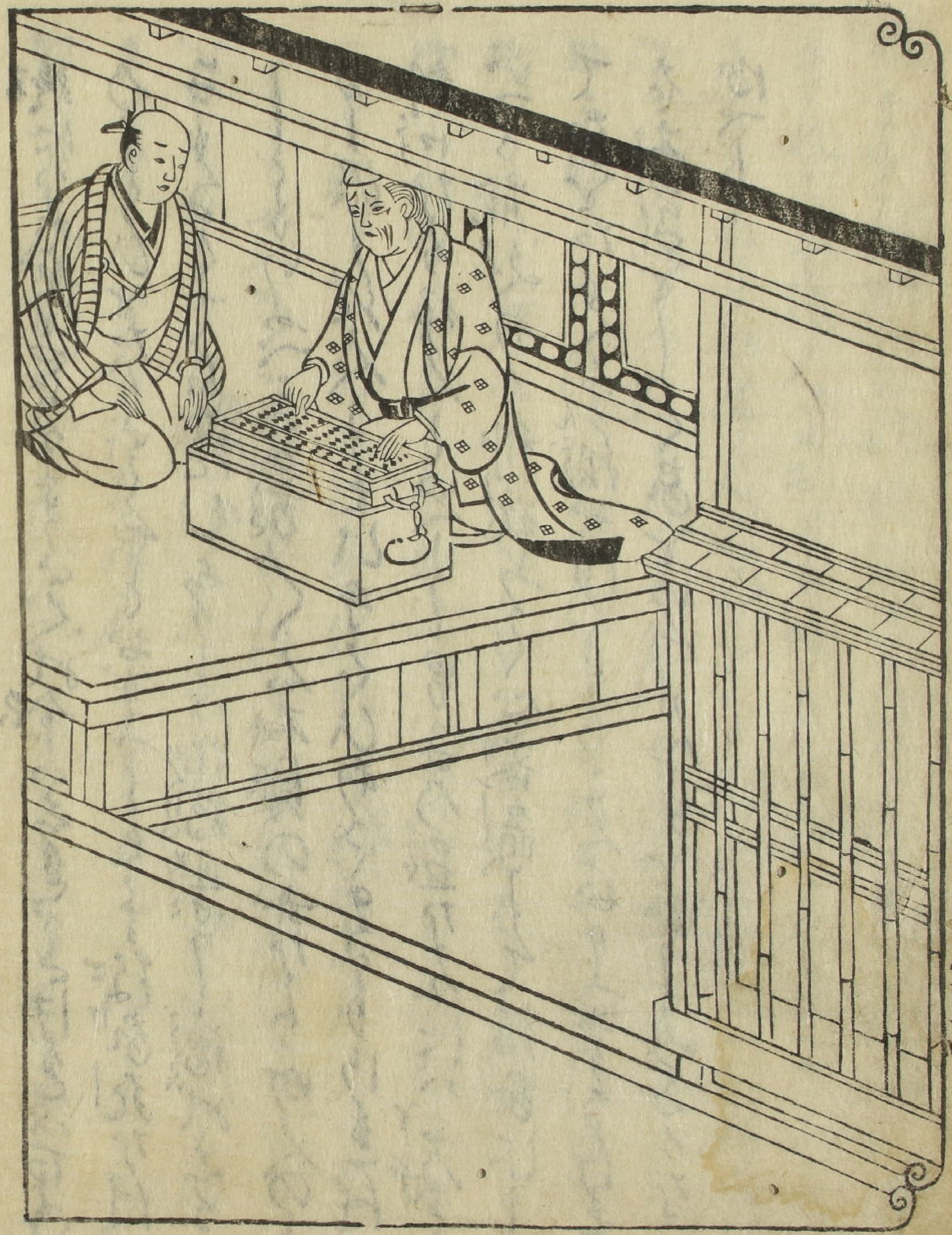
これ義なりといへどもまだたらざる所あれバ婦人賤しきハ引をうけて善をたすくるものなり同天ともいはずはなはだしくの福善禍淫ハゆゑにや云我に勝あくをなすをばんとまさ悪にうつる災をなせバ如くならむともまさ礼義あれバ天ハ人をなくるをずなはち人道をたゞさバ天命もたがはず又人鬼時ハ天は猶乃始ありとも申さんなり

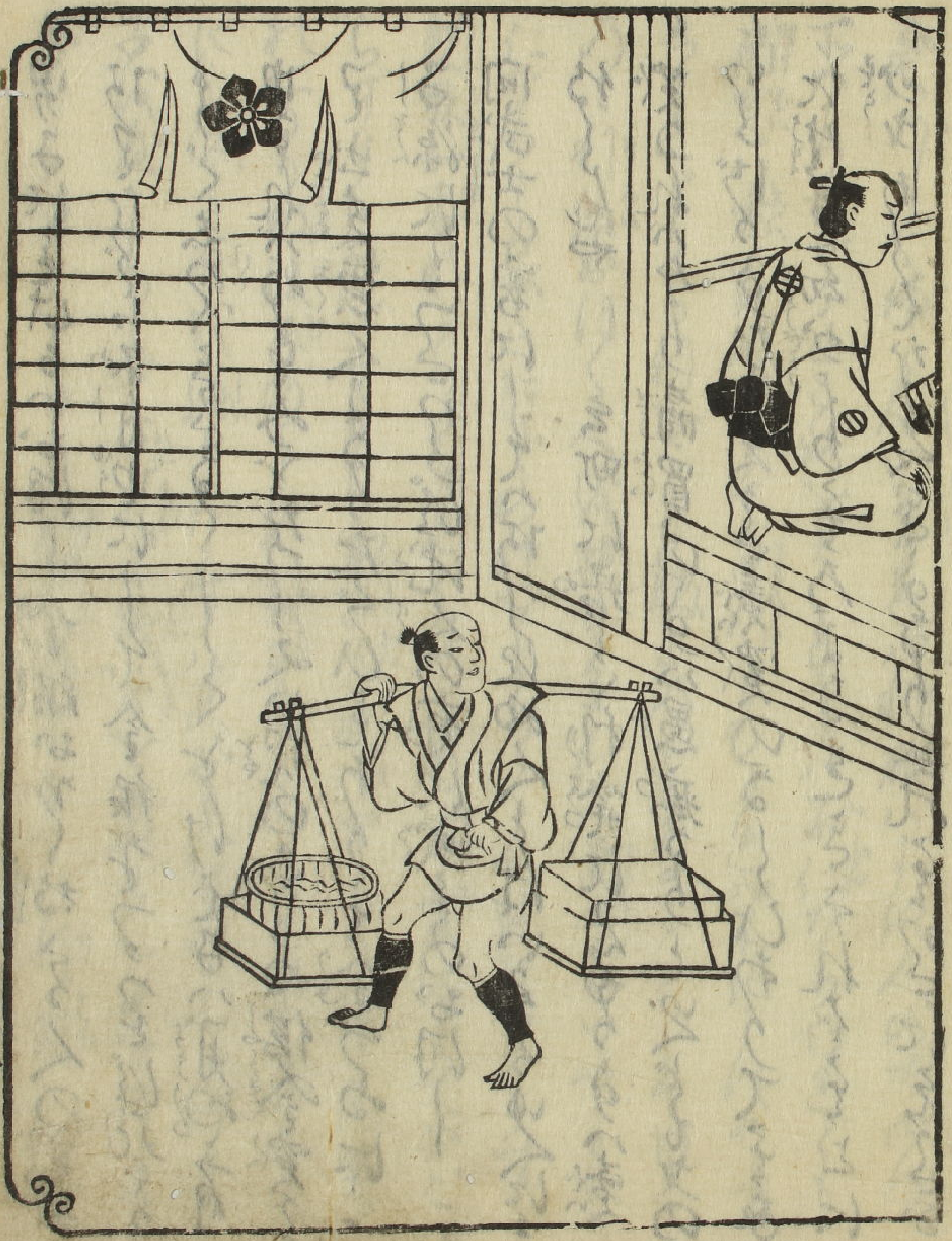
女師同云婦人の云義をするそハ牝鶏の旦をつくるといへ

一わたくし並女子訓にもおそぞさま今文いづみにもおはをならねども農工商なんもんべるに女のをおすそにいでゝゆりといとなみわり又ある後家をや死てあとをまもるれバ手代つぎ手代と相談田なひゆりとつてのちまことわざをかゝりくらしやと、ろあ緒りもらんべりことのつちも牝鶏の旦するたぐひにもあらんべるなれども家の流儀ハいろ/\ゆくべしてあらんべるや　云農工にするそのわざハ皆利欲の事なそ云義とるとは中かりて賣買とするそハ事よ云のかなり婦人内をおさむるによりて上下貴賤に飲食衣服あるか所ハおとこまもらせよ町人百姓も丈夫ありて遠慮ある事ハ丈夫にまかせて妻にゆづることを細かにするといへどもみなまかせて下知におらずして云る時ハ又それにの法を家のあれまちに利欲なる事に持たりもいどもそれを町人のまじはりてこそあんぐれて見てゆりあるいゆく

うまれし幼少より利欲にのみしひそ縁だんを枕よせハ生れつきハよき婦人もおとりはらんや武士の妻としてハくらくおしれ婦人の名をけがすべしおほし婦人又ふんべつたかき男子にまさる才智ありともおとなしき成人の志をとりてかたき一に節をまもりぬなん正しくおりよくそしぬすむなゆべし町人なりとも女ハとんおれやうしておしへんこそ縁りハまりしけき行ひで才智すぐれたる女なりとも女ハ何かよりやうこれりのるれバ千代まで幼をあとりて或ハ引とるし又ハ後家算用大海くるわとおろかなる婦人をおさくすはいてやるくわるべし利足をくすえにまでゆく銭が用を足し

後にハ其家をやぶりまきてくれ命ハ志まさきけまいハ百年のよまひもにもたりしてやとおりたとしきぼ家死なば年まみくて家絶もぬしれバ牝鶏旦せし禍れまるしもいふべき前ぐく不貞の女なり町人の女なるびよれ人まもとさまぐひわるくまるりけれバ利口なる婦人といへども男子の愚なるにハ家をいふく悦まひ利欲ふく心吝嗇してな家にして家をたくく金銀おほくたくハへおりよきるけれたまをよしく家をゆずらんとおもしみるなゆべし





男子にもせよいかほど金銀おほく持たる人の実子はうまれながら不自由にして金銀をつかふをば見しらずまづおほきくなりてもしくとけたるは用心有ゆゑあればぬすみをなし又は親のしらぬ借金をかるぞ出来悪人になるたぐひもありて金をつかふに子孫にもつたへがたく他人の有に成ものおほし同武士の家にしてはけしからぬ人とはいふなりゆくべきゆゑんや　又町に居て利発に見ゆるは売買あればなり商買のすは愚痴なりとてもそのいふげなりなりたる売買のすいわりて家に生幼少のよりをそなきさへされどもよに元来わしかたからざるなり女児にえさか

益はあしくゆゑんいかさまにも利発はよき人のせがれが不かはせぎるところ金をかくすは不仁ならねども商買は売買の利にて色欲のるまじは不仁にはあらず出るものもある利をより欲にてまろこくらくそのほまめさ利倍おほく人の損ぎるをもの商工といふとも不たなるとなるべきほどの利ぞよわく人にわたさず親族知音をもらかず見とおけ家内眷属にもしておごらずよく家をまもりて妻子眷族をやしなふべし商買によりて後家のためには我おもくもちてもいかににも自ずと有て弟をかなすは其おもむきをしらねば子孫をしへて他人に財宝をゆづらんをおしめ家かなくしとなり他人の中にては利発にある

まことにこれを汲くべきハ愚痴なり牝鶏なり武士の
妻としてはなんとせん
従学ハ論語と問く問云農工商の子ハ命を安武士とハ
ども又十石百石とる少身のものゝ親ある子ありても主
婦人のつれあひの主留守の時などは公用私用ありとく
客などの来る時妻にてつかひ裁判仕てもよき事
なれバ先生の論にまかせバ公用とあれ何ぞんの文字
知無才のまゝは摂よりかゝらぐもよき事ま
ゐらぬ事や　云吾子ハ平につゝしむ老子が道を学
女文学器用にし漢和の書とよし且志深切
なり然るに志切なく学文するいつはりの所にか用るや
吾子がごとくんば万書をよみたりとも益あるまじき懐法に
暮らく時知慎とたしなむ吾子老父が大学小解とある
や　云諺　云孔夫子鰥寡廾孤行に柳下恵なり
を引く云吾を朝しても為にかくこゝろはへる事を称
美し縁に老父これとふし　吾子不見や　云知
云吾子源氏物語を見るしや　云諺　云志あらバ行
ぞや小理にまどふかや　云請願ハ令を安む　云
牝鶏因むかと溺く婦人云丈といふもげにハ常あり
云私も聡明につゝてたまくのみなりかくかく然
とは事なくして簡しく志ありくまことに云
ようらバ丈ゆくをまちらく告る事物論なりとも
しまうれぬかどの聡明ハ万にしていつわるぞし
紙す箭よ及ぶほどの事なとも公事ともいふべく

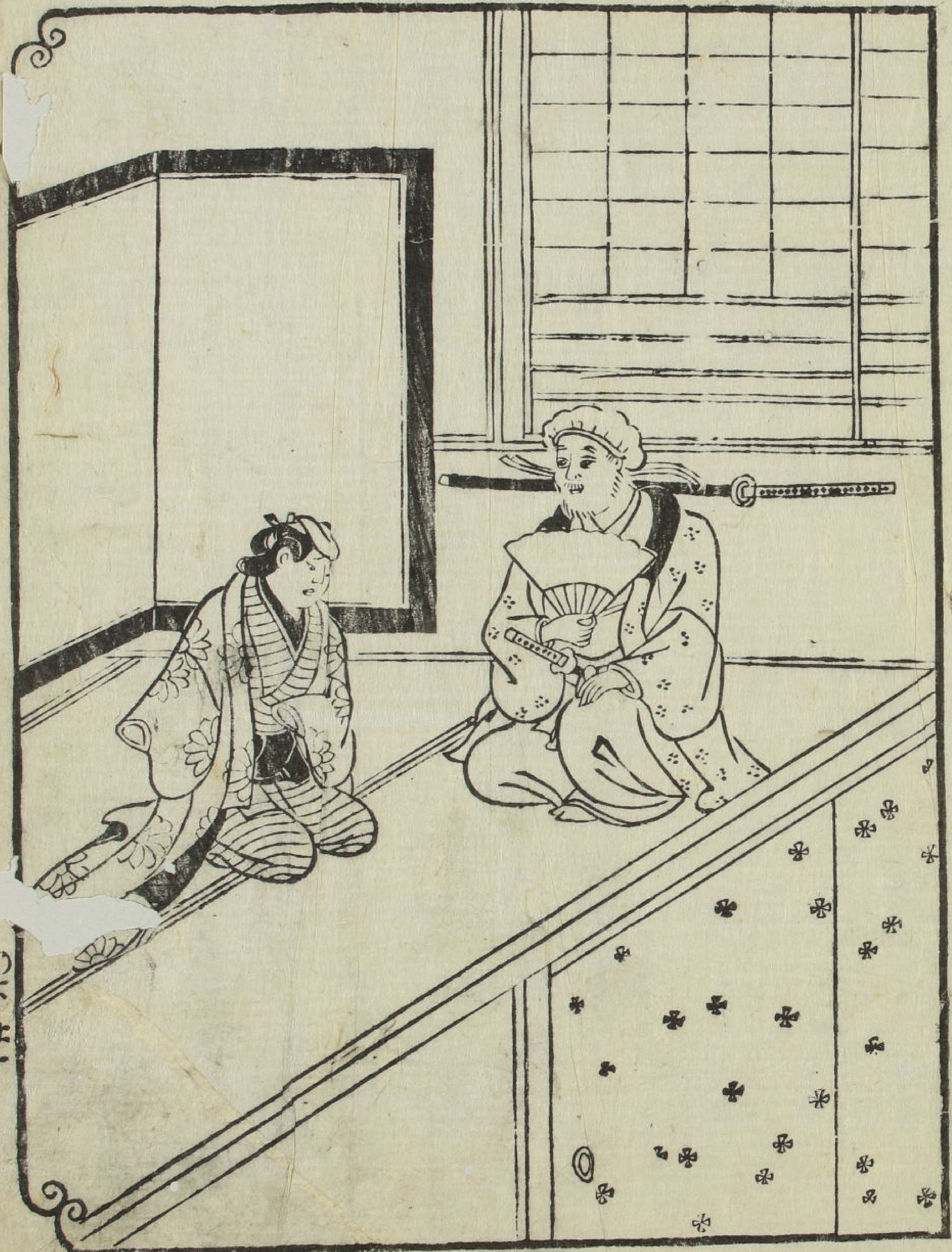
すなはちこゝも時処位（しよゐ）あり至善（しぜん）を難しく論し
わざによりてそのよろしき女ハ外（ぐわい）といひてさうりのと
かへて家をとゝのふと云公私（こうし）にはゞかる事バ我ハ内を守（まも）る
ことも夫の為（ため）かゝるべしずようろけるすいのらん君ろしバ
何ぞやといふに故（ゆゑ）に常（つね）に夫の志（こゝろざし）を守るべし文盲なる
ハ夫を引たてゝ事（じ）ごとに常（つね）の書（しよ）たる他の貞女（ていぢよ）
の故事をいひしるべしとも女にそのほかにもいふべきを
ハさどりうらみもなくめぐむことおもひ夫にいとけら
御けるる他わざるをとも聞とれ大事をもいひ給
へきを心にひまうずとも夫にわざことハ和漢（わかん）
の書籍（しよじやく）和哥（わか）箴（しん）言（げん）なるなりまことの大事とハ
云私（こうし）の事あまりのなりたる様（さまのうへ）愚（ぐ）なるかわらね

とも妻なれバ引きうけたるうへ夫愚蒙（ぐもう）なれバ
とも妻（さい）に於（おい）ても行ひのよき事をも行ひわけすべけれバ
とあしくも公私（こうし）ともに我一人の了簡（りやうけん）にも及ばず他人（たにん）
にもかたりがたき事ハ相談（さうだん）して申すべし廣（ひろ）く
親類（しんるい）ハ妻の仁（じん）わきまへて時々（ときまいず）牝鶏のしかたると
云ハ夫（をつと）もゆるさるに可（か）なしきのみとつゞくとよく
おもひきらしいゞせんしやう非（ひ）なりと云事（くど）といへとぞれ
と古来（こらい）の戒（いまし）めをしるべしこれとおもひぬくなりて夫ハ
の事く表（おもて）にいでゝ公私の事ともいひてこそあれ
他人（たにん）も知（し）るまじく夫婦のうちにてむつまじくいひてよからず
何のとがもわるき誰（たれ）かこれを牝鶏の因をしるといはん
まして愚（ぐ）なる夫をもつて是をなるべきハやまる〳〵

まさしかく黙しく見るたまけハいづくにかあらん
徹かるに登来るありむかし或太守の門人鶏鳴
に出仕して来まへて下宿す此人病毒うれバつと
まわかうれ此役義を辞せしかども才知人まこへ
文学ありて人情よろしき此人うけしバ出頭ろ
ころすと悪人なげく太守も其人貧と知強ひく
情をゆるし然らず其身豪傑栄者なるまでと一歩
此時一人してこれをつくへば朝にして日に然るの事
年久しくあるよといへども病気なれどもつて
きざるしきにかくに役を辞せんとせられしに婦人
才ある古風の上着まて史よ謂くいるハ此身い
まさらしけし今出用を勤務すさらるゝまに
今婦身にしてく業者するし婦身れ仁よなかく
恩沢とうくるの其教を忘らず農工にいたるまで
君恩のありがたきはおりよ故よ此君を万歳と
祝すもこれこれ君は堯舜此君にしてく婦身
ハ堯舜の臣たる子孫に及ぶべん忠孝仁恵こ
きはわた大臣のし今病よなくて職を辞し給へ
君ハいとしき此士農工商ハ恩沢の衰微となげ
くん志うるぞ不忠の臣ならん諸葛孔明ハ忠臣なれ
軍旅に死をしてく婦身付く傑出の才を
かし給ひくせあく五十余までハ独りとぞつとめ
給へしりとわかりで妻子あるとも私家の事は
勢ひく婦身乃影を助けん公用をくわしかるべき

妻ハ家の内にてあづかり守むは内證の労をして妻
ことはたらけく兵帥に軍らしめど云丈夫
て感心し爾ハ丈夫にまされりとしてか力めをと
よぶかりハ務べしとまづ爾が事をとら
く牝鶏のそしりをやならん妻篤く云それも妻が
勢をもていでたるの下知をするならばこその
ちか家の長まゐる人出仕の口入ことくの縁ひ
とれるると縁付縁取の用ハ男の下知をもしてい
そんならぞ牝鶏乃あしたならん云事もかに
いでなるやうとてかうすべきとも内證宮ならて
四五丈の労ハ家くなりんゆけぞ行のはづくわ
らん妾が背なりとも家族乃すへりをすべき事

あしきわざといへども公用の大事などハ亭主に女房
たるハ丈夫のかくあまり続ついでは続ひかくるし
うけがうすべからずの縁くうしと云夫の云よし爾がす
ましく私家の仕事をさくことに縁をつけずれで男女
ふ仁乃きわりく家にての和らずすよくんとつけ給
婦人云君子学に志なり人情に悲し給へ
妻ハ中しくも君子の妻として君を守なり也が
文をもかくうしともまなび給えどもくするとしるに之
とかそにハいてうじしそこにおわたくハんやたくお
させといへりそれちかなれ職を[illegible]ますにはとめしいふ
私家の政ハ云におよバず家氣の[illegible]富に[illegible]て業
家をとうかうらのへ仕女に製せ[illegible]病を務



てか[illegible]へ出仕をとゞめてかくれ家に[illegible]くハまい
そげ道ことに修行として[illegible]君に付
て衣服をとりに御書にて饗会なんどにつき
丈をまもりけしハ六のち病をうけ〳〵こ人す
余といひし年数もへくねよ秋ハつゝまで意識と
つゝめしところや大守婦人の賢とせう珍しけるもひ
なんと珍りの年おひくらく楽なりし丈婦よりかし
うじみどもも皆羨なりきわかしとなり誠に
寄特おわる子どもなかり

此婦人いふがごとく云私の用とても人にかゝらず
なりあらそふ所なり此夫婦のなかなり初めのとき我家
につたふる記録とてはのかにおぼへつかまつらず
丈姆の姓名をわすれたるゆへ口としてしるされず記
録ハ焼失せしも今いかんともしがたし

或問 香色声味善悪なれバ人として志らざるハなし
凡夫はおほく志らざるなりや夫婦の云いかん
云 ありすなハち慈母の云よ伽羅の髪にたくは
て衣裳そらぶ也わりけ香 線香 薫物なす
かりあきすなハち香の善悪なきとも仏かれの
はにかひびたにしれバ何にもおよばずすれバこそ
おもくり久を男女ともに人がらまちて似合敷と
にあハゞりとはかりむかれの為ハそれぐよ相応
合ざる人がらにあハで似合敷事に仕立とかり能よ
よし見てくらし文なる様が事そも出するハ瀟洒因姆よ
もおとこしくほめられきたるハちり久れ善悪と志は
なきともんかれりのハくれかれの久よめでゝ傾城
花乃ふつゝかもなぐしこの色とまよ何するゝか
家りのおかし音律のなかハ雅音邪声五音を命とす
ありれどいよいよにならぬずいかひの善悪をおのそ
はとりを絶て知人なくし美食されど至味なる也
うけ色をも平生食するゆへに人至味としらず是故
着に合しく飽ざるハ慈味のまさるゆへなり

或 婦人夫婦の分際を見て問云 氣粧のさしやうを承

夷歌などのうたハ女といへども人にすべからずしかれバ
まさに由ある女婦のことハ乃うちにおさむ所あり
云容造のうたハ叔女なる躰じおもく其文飾をのぞく
とうひのと乎が妻などのうたまでこれ紙などにかいてい
ひろく人にもたそれ候ことそのちりてまかせべきしておほ
きめ妾も其ことそらしけりハいとけうれんもあるべきにて候そ
ありひらんべき所田舎もてさゆくの人乃あいさゆ
ゑも見おつか傍まで井の蛙の大海とおもふがごとし
やうんぬくぬくまちさうにハ歴くぬくの彩造
に粉兒ときこゆるとらうにもいたらしさなく気経
まさも下地おもうからぬ魚よ外苑のわかちべかまる
と東の露に河伸のわれるがごくそれむけり

すにとゞまずらにおけくも気粧し云けにて
みだりにおかしつけ給ふよくひれまさりくろく老ゆかむる
ぶらくおぶらくひくむかしのにほそれ背よりたく
ひおまなく待ちバかかる人のたかは女婦のごとく
をいとく待り予これとまで云ふいふ夷言男子に
も京をぶらり田舎をうらハ区別おちがるおの常乃
事にもかぶらの男子文武のげいだにも田舎
は広きやうにもせまく其の芸者はせますれ申しにて
も給人のおつすることを給ふれバひとつくをまる
とやなけむびせてをろせすり比ゆくよ京師と
云師ハおつまりむしかんとどゝ女子の容貌をさこそ
ハ待ちめといへども京婦の数美しくけり

問 志同云吾子が女訓心理の交用をくはし何ぞいはざる
云 吾不敏なりいまだ心理を解することあたはず まさに心理
のまどひを解におゐてハ楽処女学訓道まりゆく
せり文何をるべからん　問 先生の女子訓何ぞ是と
見るやらんの女子ハ吾子が云所むずかしく云解とつ
まびらかにせんものをバ吾子が女訓何の益かあらん
云 吾子が問のごとし但ハ学あるも文才あり知ある婦人
のすなはち却てぬれど但女子ハ四書あるハ小学あり列
女伝あり何ぞ老父が女訓とことに読むや然れども世俗
を見るに文才学力ある婦人ハ格学者のごとくして
和風をうしなひ異唐人の妻になるんとするところ
漢国ハ唐の風あり和国ハ和国の風あり此国に生れて
此国の風をうしなふハ誤なり又和風にかなはんとする
人ハ文学をこのむ聖人の道に遠ざかるをバ漢風にならひ
らふ男子といへども一をしりて二をしらざるハ学者豪
傑にあるべけれどもあるべからず況や婦人をや故に老
父女学訓を編て四具の婦人におゐてハ老父の女訓
なりといへども細事におゐてハ拙むるが用ゐる事
たりし故に予此女訓を編なるぞ論の書はあるべきハ
をたゞ人とよりに明翁の心法を漢儒の訓詁になし
て麁略に漢儒の訓詁も明翁の心法によりておさめ
所ましに義理なす漢儒をさけく明徳の学とのこ好
むハおやまれり明翁の心法をもつて漢儒の訓詁
のことにいふまで非なり聖人の学に二ハあるべからじ

舌をするもの〻龍の天に昇りとしやそれ小蛇の尾と
あく鳥ふ似たれども老父が云ことハ先哲ハなすさしう
すなはち鷹の高飛とうしやそれ鳥のとぶ事と
おなじからず。されども予が云分舌をとるさんする故おのが道
愚女ありく曹文が女訓と見てくいまだ不案バ予も
戯言と見てく鄙俗の拙きをほほえむらん未
書見ならふみ武経と志らけ八子が草双紙と見
て女しれ志とおこし曹文が女訓と見てく大に迷
ぞくとうなる幸何ぞこれにしかん此論八吾子が問
吾子の予が此書他人の見分にそなへんとにハお
らず慈愛の姪あり一筒を請故よこ平生の事業
あいふもの〻文事業言行女容粧造をまうりつくり

ほいとなすことりへと世六と世間のけれ癖をとく
なれそすくまつずまこにつけあざことにつき
うきむつびしと幾志物ばおろりてもわされ
むしそでまあるくしほかきうちともす
まさなうぬづれ人もなくうくしおいせしと
おりひくなうぞぐみてくるんそこにもなうし
あさうぬほいとしをとるびくれば消息
おろふおりよりかこさ世のよもにくくと終
はおりひさそまうぬ志らしとどん経後
せし此ほうしにほらんじもうけさせ侍べし
されどワざとはとらずてにつれされどもむりしとお
ぼしいづく今をも志のぞを総づなすぬはゞかりさ

をはしをワがおもかげとや御らんじたまを
らんかすしうはじ縁かさゞろたわとみすうバうさ
ドけるく袖とくさゆせ給ふ志をとりとかまらんゞ
をまうらすしうハそとしくて今志がしいらまには
しけまどさのゝハ見ンどら給ふ紀ゆへしとらざ
くしくとう紀さうしてなぐるかるとうぐ千重（ちゑ）を
たうしー山と申ぞそあらうみとつくあの世かり給ふ
ちハまうしにたいめせさせ給ふともおはせずし
見うる人をさぞれやりとらくささうん
ワがみすゞさくらしげぐれのさう志
あしくバうつし給ふとせまうらけくれと
かくさむくさじとわまさ　いうません

思ひくこうまうにとは慈（じ）しうかのとうはかさし給ふ
せんとあらるゆゑなくしけるにあづまのせうがはゞ
ふくまて給ふしなむら給ふもなくうらうしき
がう御うしうくおもかげとるゞあまりそれまいるう

元禄十一歳戊寅二月朔旦

長谷川町

御書肆松會三四郎板